

赤信号になる前にみんなと渡らず引き返せ!

最新 医療経営 Phase^{フェイス・スリー}3

2014
March
No.355

3

地域特集

熊谷市・深谷市

(埼玉県北部保健医療圏)

ほか

TOP 座談会「経営談義」



竹川節男

医療法人社団健育会理事長



川渕孝一

東京医科歯科大学大学院教授

特集

2025年までに なくなるのは こんな病院だ!

現状の保険医療の枠内でしか経営を考えられない

混合診療により、がんをはじめとした疾病の「早期発見・早期治療」も進む。渡邊理事長は「たとえば1センチのがんを無症状のうちに見つけ、早期に治療をすれば、ある程度進行した場合と比べて医療費は3分の1程度で済みます。当グループでも2008年に、民間医療機関で初めて陽子線治療機器を備えた「南東北がん陽子線治療センター」を開設しました。このような治療法のニーズは今後も高まっていくと考えています」と語る。

他国に真似できない「知的財産」が輸出の武器

日本の医療費の財源確保は喫緊の課題だ。渡邊理事長は、解決策として医療の海外輸出を挙げる。

日本の医療は世界的にみても質が高いと評価されており、基礎的な医療技術があるにもかかわらず規制が多いため、医療機器や新薬の開発では世界から大きく後れをとっているのが現状だ。渡邊理事長は日本の医療の強みとして、他国に真似のできない「知的財産」を有する日本の医療、介護、福祉を挙げる。

たとえば日本の医療・介護ロボット

トの開発や、放射線機器の小型化といった技術。アジア各国には介護の職種はまだなく、介護技術も輸出できる。「海外から研修生を受け入れ、日本で働いてもらう。そうしたことも進めていなければ、10年先の日本で医療や介護を担う人はいなくなる」と渡邊理事長は予想する。

「日本の医療や介護の心の込め方は、真似できるものではありません。ミャンマーやラオスに視察に行くと社会に貢献したいという夢を持ち、目を輝かせた若者にたくさん出会います。そうした人たちに、日本で医療や介護のことを学んでもらう、自国に帰って活躍してもらうような人的交流も始めています。将来的には、アジアに特別養護老人ホームや介護老人保健施設をつくることも構想しています」

「海外と協調しつつ、日本の医療を産業化していくかに日本の医療の未来はかかっています」と渡邊理事長は力を込める。

医療は「人がよく生きる」ための基盤である

医療にかかる財源確保が論点と

日揮および株式会社産業革新機構からの出資を受け、日本の医療技術やホスピタリティを活かした「医療のパッケージ輸出」を開始した。

「医療を輸出産業にする」ということは20年前から言ってきましたが、ようやく政府が医療法人の海外展開を許可するとの見解を示しました。海外投資ができるようになり、医療法人を非営利と定めている医療法人法は今後なくなるでしょう。株式会社医療への参入、混合診療も幅広く認められるようになると思います。医療を取り巻く環境は、なし崩し的に変わっていきます。日本にはもう財源がないからです」

こうした動きに懸念を示す医療関係者も少なくないが、北原理事長は「医療法人の海外進出を認めると、一番儲かる、いわゆる、いかにわしい医療が提供される可能性があります。規制緩和する一方、海外進出する医療法人には一定の基準を定めていかなければいけません」と話す。

また、介護人材の不足が叫ばれるなか、EPAによる海外からの人材確保が進められているが、北



北原茂実・医療法人社団KNI理事長

2025年までになくなるのはこんな病院だ!

日本の医療のあり方を考えよ

10年先の社会の変化に対応するのに、足元だけ見ていたのではつ

ん。そうすれば若い人たちへお金が行き、国へ年金や税金、保険料が支払われ、国の借金を減らすことができます。しかし、当然ですが政治家はこれを実行することはできません。何から何まで変えなければ前へ進まない日本の実態があります」

北原理事長は20年前の開院時から、日本の医療のあり方に異を唱え、独自の病院経営を貫いてきた。その本質にあるのが「医療」に対する独自の考え方だ。「医療は単に「病院」という箱の中で医療者が提供するサービスであり、それをお金で売買するものだ」と誤解されることが多いですが、私の考える医療とは、いかにして人がよく生き、よく死ぬかの基盤となる、社会そのもののなのです」

このような理念のもと、自院では、医療と貨幣経済を切り離さずさまざまな試みを続けている。「高齢の患者が入院すると、約3分の1の家族が世話を病院に任せ、面会すら拒否するというのが日本の実態です。入院費用を払いさえすれば、後は病院がすべて面倒をみるのが当然という考えがあるからです。当院では、以前から患者家族

いていけないことは明らかだ。北原理事長は、今後の医療者に必要な3つの視点があるという。「1つ目は『マクロの経済のメカニズムを理解する』、2つ目は『テクノロジーの行く末をただしく見極める』。将来の医療を構想し、現在開発されている種々の医療技術の開発を進めることが正しいことなのか、方向性を見定めることが必要になります。3つ目は、『医療に対する倫理観をもつ』ということとです。医療者はこれらを均等に考え、ただ「手術がおもしろいからやる」ではなく、本当にやるべきかどうかを考える。そうした感覚のもとに仕事をすべきです」と強調する。

「現在の日本医療は世界のなかでガラパゴス化しています。今後の急激な社会の変化で、現在ある医療法人は1つも残らないかもしれない。生き残るための条件は、世のため人のために、より良いものをより安く提供する「ことです」

医療者は、医療界におけるこれまでの固定観念を捨てたうえで、世界をよく見ながら、必要な医療を提供していくことを考えるべきだ。